

いよいよ冬の到来である。零下三十度前後の気温は、身を刺すような痛い寒さで、想像を絶し、言葉が知らない。防寒の服、手袋、帽子、靴と一応の支給は受けているが、程度が悪く、よくぞ耐えたと思ひ出しては身の毛がよだつ思いだ。

着ぶくれて、ただでさえにぶくなる行動は、ちょっとしたものにもつまづき、転ぶというありさま。その姿は哀れというほかなく、捕われの身の悲哀を感じ、「冬の時代」という表現がピッタリだ。雪の凍った上で火をたき、体を温めて仕事にかかる。氷の上に座っての作業で痔が痛む。血がにじみ、どうしようもない。火にあたることで、また作業だ。冬の火はツルべ落として、木枯らしがヒューヒューと吹きつける。暗い夜道をトボトボと足を運ぶ。元気な人が急に目が見えないと言う。夜盲症、目くらである。ビタミンAの欠乏、栄養不足がさらに進んでいる。明日は我が身と、手を引く。

冬の後半になると、かねて蓄えていたまきが底をつき、三十センチの丸太を担いで帰る。肩に重さが食い込

む。しかし、命綱だから懸命に担いでくる。部屋に入り暖をとり、雑炊を流し込んで、やっと生気をとり戻す。

冬は特に体力の消耗が加速され、毎日が何とか生きようとする死との闘いでもあり、死と直面したときの人間の生命力の強さをしみじみと感じる日々でもあった。

疲れた体を、蚕棚のような寝台に横たえ、いつ帰るともわからぬ寂しさに耐えながら故郷の山、川、肉親、恋人のこと等を考え、いつしか深い眠りについていた。

シベリア抑留体験記

滋賀県 村田 英信

満州国三江省方正県興農合作社において農民指導の公務員として三年間勤務、昭和二十年五月現地心召、五月二十一日綏陽七六四部隊に入隊。

八月初旬綏芬河よりソ連軍の侵攻に遭い、部隊は交戦しながら朝鮮方面に向かって後退する。連隊長は割腹されたと連隊副官の上甲大尉（自分の中隊長）から聞かさ

れる。河道方面で連隊はソ連軍に全員投降する。列車で牡丹江に護送され、飛行場の格納庫に収容される。

十月中旬、ハルビン經由松花江の鉄橋を渡る音を後ろにシベリヤへ向かって長い長い貨物列車で護送される。幸い自分は軍医や衛生兵数人の使役として二人加えられ、十人で一車両を与えられる。その他の車両は四、五人くらい詰め込まれ、重なり合ってすし詰めの状態だった。

十月下旬、バイカル湖を右窓外にどんどん北上する。日に日に寒気が加わってくる。投降時が夏場の軍衣だったため、そのままの姿で氷点下十五度くらいの車内はたき火を絶やさないと命令され、幸い夏衣でも辛抱できた。目的地に近くなったところに防寒外套が支給された。列車がとまって全員下車する。タイセット地区の第二収容所へ第一歩を印す。

これより苦難の生活が始まる。十一月初旬のことだったと記憶する。集団脱走を防止するため収容所の割振りにはばらばらにされ、戦友がどの収容所に行ったのか全然わからなくなった。一夜明けてまた班の編成。幾つもの

二重張り天幕が立ち並ぶ。一幕舎の収容人員は約六十人くらいで、二段式につくられている。一人分のスペースは幅四十センチで、メジロ押しに重なり合って寝られる程度が自分の城で、毛布一枚支給される。これにくるまって一夜を過ごす。

第二日目、起床五時、当番制で食糧受領し配分する。

六時三十分作業整理。点呼は暗やみの中で行われ、寒さに震えながら順番を待って、小隊ごとに門を出る。作業は伐採作業で、斧と鋸を受け取り約一時間ばかり森林の中を歩いて作業場に到着するころ明るくなってくる。一分隊十人で、八時作業始め、規定のノルマを消化するよう、「ベストラ、ベストラ（早く早く）」と追いつてられる。十二時から一時まで中食時間が与えられ五センチに十センチくらいの黒パン一個にエンドウ豆のスープが飯ごうのかけごうに一杯だけで終わり。午後の作業開始。切り倒した大木を規定の長さに切断し集積所へ運搬。枝打ちされた生枝を集めてこれを完全に焼却する。午前十一時ころ太陽が出て午後三時ころには日没とする。五時に作業終了して収容所へ帰り着くのは六時ごろ。また暗

やみの生活が始まる。毎日同じ作業が四月ころまで続けられる。

やっと気温も上昇して温かく感じる季節になったころ、収容所内にダモイ東京の話題をソ連兵たちが我々に呼びかける。本当とは思えないが、これで帰国できればとどれもが淡い希望を持つようになったころ、移動が始まった。列車に乗せられ五時間くらいで下車させられ、今度は丸太でできた収容所に入る。

ここでは毎日建設作業に従事する。丸太づくりの建物を幾つも建てさせられた。ソ連兵士の話では、ここは新しいシベリヤ鉄道が敷かれ、駅舎と関係の建物とのこと。内装の壁塗り等は夜間作業で、土に石灰をまぜ合わせ、道具なしで掌で土を塗り、枝で平にこすってできがりがり。

ここの作業が終わった七月ころになって出張作業に出る。我々は二十人一組で十キロほど離れた川のとりに天幕を張り、広大なバレイシヨ畑の草取り作業を毎日行う。監視のソ連兵はただ一人だけ。毎日同じ作業を繰り返すだけ。十日ばかり過ぎたころ大雨が二日間降り続

き、ゆっくり骨休めができた。

給与のパンが届かなくなる。川の増水がはなはだしく、対岸との連絡が絶たれ、孤立の状態となる。自給のため親指くらいになったバレイシヨを夜になると目立たないように掘り起こし、飯ごうで蒸して腹の虫を抑える。しかし、翌日は全員下痢を起こす。小指くらいの小さなものは毒性があり、腹痛を起こすことが判明する。

雨が上がっても食糧は届かない。草取り作業どころではない。付添いのソ連兵は我々をおいてきぼりにして部落の方へ消えてしまう。自足自給のためソバの花芽を刈り取り、虎の子の岩塩で味つけて食べる。横に流れる川を見ていると、イワシくらいの小魚が目につく。名案が浮かび、ワイヤ線で釣針をつくることができ、腰の真田ひもの糸で釣糸にし、柳の枝を釣竿とし、ミミズの餌で釣り上げる。おもしろいくらいに釣れ、久しぶりに栄養がたっぷりとれる。残りの魚は背開きにして干物の保存食をつくる。たまたま農民が通りかかきこれに目をとめ、ぜひマホルカ（たばこ）と交換してくれと話かけられ、十四でコップ二杯のマホルカを入手して大変うれし

かった。ソ連兵の連絡で一週間目にパンが届く。やっと人心地を取り戻すことができた。

七月初旬第二回目の移動が始まる。ダモイ東京を期待する。貨車に乗せられ南下する。翌日バイカル湖が見えて内心喜びを感じたところ全員下車。船に乗せられアンガラ川へと下る。夏期は日照時間が長いので午後五時ごろ下船させられる。船を降りた途端に物すごいブヨの来襲に目も口もあけていられないありさま。顔や手はみるみるうちに変形するくらいに攻められ、上衣を頭からかぶりやっと収容所につく。土地の住民や護衛の兵士は蚊帳の布でつくった防虫帽を着用していた。

翌日からバレイシヨの収穫作業に従事する。八月八日に初雪が降って、朝夕めっきり寒さを感じる。下旬には時々水が張る寒さ。九月中旬までにとり入れを終わらないうと芋が凍ってだめになると、「ベストラ・ベストラ」と急ピッチで収穫作業を行う。

十月に入り毎日鉄道敷設の道路づくり作業が続く。食糧の給与が少ないため、栄養失調者が続出。自分もその一人となり、重労働ができなくなる。

十一月から翌年二月ころまで収容所内外の軽作業（近くの山中に炊事や暖房用のまき取り使役）に従事する。

ある日はアンガラ川いっばいに張りつめた氷割り作業。監視の兵士にこの氷を何にするのかと聞くと、ずっと奥地の作業に従事する日本兵の飲料水として送るのだとのことである。一組五人ずつバールのみの道具で高さ一メートル、幅一メートル、長さ二メートル積み上げるのが一日のノルマである。川の氷は一メートルくらいの厚さはあるが、バールで割っても大きな氷はとれない。一日かかってでもノルマをこなすことができず、泣きたいほどである。翌日になるとトラックで運搬され、また同じ作業を行う。気温は零下二十度前後で、昼の一時間の休みも川の氷の上で震えながら中食をとるありさままで生きた心地がしない。でも奥地で重労働をしている同胞のためと涙を流しながら互いに慰め合い作業に従事する。

あるときは栄養失調で死亡した戦友の埋葬のため墓穴掘りの使役が二回あった。冬期は地面が凍りついているために、深さ一メートル長さ二メートルの穴掘り作業は半日もかかり苦労したものである。

管内作業でこんなこともあった。自分たちの排せつした尿や便がすべて氷になっている。これをツルハシで割りむしろに乗せて管外の谷間に捨てる使役があった。雪解けになってその谷間の横を通ったとき、尿や便が解けた悪臭が忘れられない。

十二月のある日、一年ぶりに入浴ができること知らされ、期待したが、実態は次のような次第。アンガラ川から入浴場まで長い長い二列横隊をつくり一斗だるに取手をつけ何十回となく手送りで百二十メートルくらい水を運ぶ。外気が寒いのでおけの外側から氷結し出し、浴場に到達したころには水は半分くらいになっている。いざ入浴。二人でおけ一杯の湯をもらい消しゴムくらいの石けんを一年ぶりに体を洗う。次の一杯で石けんやよごれを洗い流し、やっとドラム缶の風呂へ向かう。順番をまって一人ずつ湯にひたることができた。しかし次の人が十五を数えると交代する。何十人も入浴だから仕方がない。このときほど風呂のありがたさを感じたことはない。大変貴重な体験だった。

三月ころまで石割り作業に従事する。パールとツルハ

シのみで山中の岩盤を砕き碎石をつくり、トラックに積み込む作業。翌日はトラックで運ばれた碎石で鉄道線路づくりと側溝掘りの作業を隔日に繰り返す。零下三十度までならば作業を続ける。三十度を超えれば作業は待機になるが、毎日二十度前後の日が続いた。しかし時たま零下三十五度、四十度の熾烈な気温も体験する。四月ころにまたもタモイ東京の話題がのぼっても、今度は本当とは思わなくなる。アンガラ川の氷が解け始めたころ自動車で移動が始まり、転々と移動、作業に従事する。

十月中旬、列車が到着したところはナホトカ港。いよいよ日本に帰れる望みがわいてくる。列車をおろされ、身体検査が始まる。女の軍医が尻の肉をつまんで右と左に分けられ、健康な者だけタモイ東京だと告げられる。体の弱い者は健康になるまでナホトカで静養とのこと。生死をともした友人が右側の弱者の列にいて自分は左の列で別れ別れになるのがいやで、左の列から右の列へもぐり込み友人と行動をとにもする。左側の健康体の列はおりた列車に乗せられどこかへ連れ去られる。我々の列は、一週間ばかりして日本の興安丸が入港（十一月二

十日と記憶する。懐かしの舞鶴港に入港する。

これで本当にダモイ東京が実現した。夢のようだった。検疫を済ませ、十一月三十日、夢にも忘れなかった近江富士が眼前に映り涙があふれ落ちる。

シベリア抑留体験記

滋賀県 常喜 正和

私は、昭和二十年三月上旬と五月下旬の二回の空襲を東京の部隊にて体験し、親子爆弾を身近に受け、その恐ろしさを目のあたりに見ながら、五月三十日付で満州の部隊に転属を命ぜられ、即日出発いたしました。

空襲被害のため東京駅や横浜駅も列車運転は休止にて、やむなく新宿より小田急にて藤沢に出て、東海道線を下り滋賀県の故郷に立寄り、いざ出発のとき、今度は大阪、神戸の空襲に遭遇す。仕方なく京都より山陰線にて和田山回り山陽線の姫路駅に出て、一路下関に向かう。

憲兵隊より、東京、満州の両部隊に連絡をとり命令を待つも、玄海灘は米軍潜水艦の出没激しく、出発の目当ても絶たず、やっと四日目に山陰仙崎という小さい漁港より漁船にて、夜陰にまぎれて玄海灘の高波に救命胴衣をつけて釜山に上陸した。

言葉も通じない外地は初めて、若輩の身の一人旅、急行列車なれど周りは朝鮮や満州の人たちばかり、日本内地は国防色一色なるもこの方々は民族衣装の真っ白の服装に、かえって気持ち悪く思いながら、東京出発より十二日目にやっと新京に到着した。

内地に比べて平穩の満州も、次第に戦雲急なるをひしひしと感じる中、七月三十日に八月十五日までの予定で吉林郊外に出張したが、八月上旬ソ連との開戦に部隊との連絡もとれず、出張中なるもやむなく帰るべく新京に向かつて無がい車に乗る。途中駅にて軍司令部と一一緒に移動してきた部隊を発見、急ぎ隣のその列車に飛び移り、吉林經由通化に至り、ここにて終戦を迎え、はっきりしなかったが、玉音放送も聞いた。

命より大切にしていたあの八月二十日の武器返納式、